



TITLE:

On an analogue of Jesmanowicz' conjecture
on exponential Diophantine equations
(Analytic Number Theory : Number Theory
through Approximation and Asymptotics)

AUTHOR(S):

宮崎, 隆史

CITATION:

宮崎, 隆史. On an analogue of Jesmanowicz' conjecture on exponential Diophantine equations (Analytic Number Theory : Number Theory through Approximation and Asymptotics). 数理解析研究所講究録 2014, 1874: 64-70

ISSUE DATE:

2014-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/195543>

RIGHT:

On an analogue of Jeśmanowicz' conjecture on exponential Diophantine equations

Takafumi Miyazaki
(Tokyo Metropolitan University)

2012 年 10 月 29 日

1 Introduction

a, b, c を互いに素な固定された 1 より大の自然数とする. このとき, 指数型ディオファントス方程式

$$(1) \quad a^x + b^y = c^z$$

を考える. ここで, x, y, z は自然数変数である. 方程式 (1) は単数方程式の一部であり, その解の個数の有限性は, 既に得られている. また, 対数の一次形式に関する Baker の理論から, 解の大きさの上界を得ることが出来ることが知られている. しかしながら, a, b, c に具体的な値を与えた場合でさえも, 方程式 (1) を解く, すなわちその解を全て決定することは簡単ではない.

方程式 (1) に関する最近の研究の多くは, 自然数 p, q, r に対して $a^p + b^q = c^r$ を満たす三つ組み (a, b, c) を扱っている. 特に, Jeśmanowicz [2] は, $p = q = r = 2$ の場合には方程式 (1) は唯一の解 $(x, y, z) = (2, 2, 2)$ を持つと予想した. すなわち

Conjecture 1. a, b, c を互いに素な自然数とする. $a^2 + b^2 = c^2$ を仮定する. このとき方程式 (1) は唯一の解 $(x, y, z) = (2, 2, 2)$ を持つ.

この問題に対する研究は多くあるが, 一般には未解決である. Conjecture 1 の条件を満たす三つ組み a, b, c は (原始) ピタゴラス数と呼ばれる. それらは次のようなパラメータ表示を持つことが知られている (b を偶数とする):

$$a = m^2 - n^2, \quad b = 2mn, \quad c = m^2 + n^2.$$

ここで, m, n ($m > n$) は互いに素かつ偶奇性が異なる自然数である. m, n に関する様々な条件下で, Conjecture 1 は正しいことが証明されている. 例えば,

- $m = 2, n = 1$ ([9]).
- $n = 1$ ([3]).
- $m = n + 1$ ([1]).
- $m \equiv 4 \pmod{8}, n \equiv 7 \pmod{16}$ または $m \equiv 7 \pmod{16}, n \equiv 4 \pmod{8}$ ([6]).

特に, 上記の Lu [3] と Dem'janenko [1] の結果は m, n の境界条件を扱うものであり, 他の研究結果にも役に立つもので重要である. 最近, それらは $c \equiv 1 \pmod{b}$ の場合に拡張された ([8]).

この稿では, Conjecture 1 の類似問題を考える. 以下の問題を提起する.

Conjecture 2. a, b, c を互いに素な自然数とする. $a^2 + b^2 = c^2$ (b は偶数) を仮定する. このとき方程式

$$(2) \quad c^x + b^y = a^z$$

は, $c = b + 1$ のときにただ一つの解 $(x, y, z) = (1, 1, 2)$ を持ち, $c > b + 1$ のときには解を持たない.

$c = b + 1$ のとき, 方程式 (2) は確かに解 $(x, y, z) = (1, 1, 2)$ を持つ. 実際, $c + b = (c + b)(c - b) = c^2 - b^2 = a^2$ が成り立つ.

主結果は, Conjecture 2 が部分的に正しいことを主張するものである.

Theorem. $c \equiv 1 \pmod{b}$ のとき, Conjecture 2 は正しい.

証明は, [8] の手法と, 対数の一次形式の理論, いわゆる Baker の理論を用いる. 以下, 方程式

$$(3) \quad (m^2 + n^2)^x + (2mn)^y = (m^2 - n^2)^z$$

を考える. ここで, m, n ($m > n$) は互いに素かつ偶奇性が異なる自然数である.

2 $n = 1$ の場合

この節では, $n = 1$ の場合を考察する. 実際, その場合に Conjecture 2 が正しいことを証明する. これは, Conjecture 1 に関する Lu [3] による結果の類似である.

方程式 (3) に $n = 1$ を代入すると,

$$(4) \quad (m^2 + 1)^x + (2m)^y = (m^2 - 1)^z$$

となる. ここで, m は正の偶数である. 方程式 (4) の解 (x, y, z) をとる. 方程式を法 $(2m)^2$ で考えると (m が偶数であることを考慮して),

$$(m^2 + 1)^x \equiv m^2x + 1, \quad (m^2 - 1)^z \equiv (-1)^{z-1}m^2z + (-1)^z \pmod{4m^2}$$

だから, 合同式

$$m^2x + 1 + (2m)^y \equiv (-1)^{z-1}m^2z + (-1)^z \pmod{4m^2}$$

を得る. 次に, これを法 $2m$ で考えると, $1 \equiv (-1)^z \pmod{2m}$ を得る. この合同式の法 $2m$ は 2 より大きいので, 実際には等号が成立している, すなわち $(-1)^z = 1$ より, z は偶数である. よって

$$m^2x + (2m)^y \equiv m^2z \pmod{4m^2}$$

を得る. これから, 左辺の第二項は m^2 で割れることがわかる.

もし $y = 1$ ならば, 2 が m で割れることになるので, $m = 2$ となり, 方程式は $5^x + 4 = 3^z$ となる. これから, $(3^{z/2} + 2)(3^{z/2} - 2) = 5^x$ と書けることがわかる. この左辺の因子は互いに素であることは簡単にわかるので, その積が素数のべきであることも考慮すると, 小さい方の因子は 1 に等しいことがわかる. よって $z = 2$ であり, $x = 1$ となる.

最後に $y > 1$ となる場合を考える. このとき矛盾を見つけることが出来ればよい. 場合分けをする前の合同式から, $x \equiv z \pmod{4}$ を得る. 特に, x が偶数であることがわかる (z は偶数であるので). よって, $x = 2X, z = 2Z$ (X, Z は自然数) と書ける. すると, 方程式 (4) を変形して $DE = (2m)^y$ と書ける. ここで

$$D = (m^2 - 1)^Z + (m^2 + 1)^X, \quad E = (m^2 - 1)^Z - (m^2 + 1)^X.$$

正の偶数 D, E の形を決定するために, それらを法 $2m$ で観察する:

$$D \equiv (-1)^Z + 1 \pmod{2m}, \quad E \equiv (-1)^Z - 1 \pmod{2m}.$$

もし Z が偶数ならば, $D/2 \equiv 1 \pmod{m}$ より, $D/2$ は奇数かつ m と素なので, (D が $(2m)^y$ の約数であることを考慮して) $D = 2$ とならなくてはいけなくなるが, これは明らかに不可能である. よって Z は奇数であり, $E/2 \equiv -1 \pmod{m}$ より, $E = 2$ が導ける. すると $D = (2m)^y/E = 2^{y-1}m^y$ なので, $(D + E)/2$ を考えて

$$(m^2 - 1)^Z = 2^{y-2}m^y + 1$$

を得る. これを法 m^2 で考えると, $(-1)^Z \equiv 1 \pmod{m^2}$ となり, 前にみたようにこれから Z が偶数であることになるが, これは矛盾である.

3 解の偶奇性

Conjecture 1 の研究において, 解 x, y, z の偶奇性を考察することは, 多くの先行研究において重要な役割を果たしている. それは, Conjecture 2 に対しても同様である.

m, n に対して, 整数 $\alpha \geq 1, \beta \geq 2, e \in \{1, -1\}$ と正の奇数 i, j を次で定める.

$$(5) \quad \begin{cases} m = 2^\alpha i, & n = 2^\beta j + e & m \text{ が偶数の場合,} \\ m = 2^\beta j + e, & n = 2^\alpha i & m \text{ が奇数の場合.} \end{cases}$$

注意として, m が偶数かつ $n = 1$ の場合には, 上記の β, j, e は (一意的に) 定められないが, 前の節で示したことから, $n > 1$ を仮定してよいので問題ないことがわかる. (5) の記号の下で, 次のことが証明できる.

Lemma 1. $2\alpha \neq \beta + 1$ を仮定する. (x, y, z) を方程式 (3) の解とする. もし $y > 1$ ならば $x \equiv z \pmod{2}$ が成り立つ.

証明は, (5) を (3) に代入したものを, 法 $2^{\min\{2\alpha, \beta+1\}}$ で考察することで得られる.

以後, $c \equiv 1 \pmod{b}$ を仮定する. すなわち,

$$(6) \quad m^2 + n^2 = 1 + 2mnt$$

と書く (t は自然数). 条件 $t = 1$ は $m = n + 1$ と同値であることに注意する. (6) より, 次が導かれる.

Lemma 2. (x, y, z) を方程式 (3) の解とする. すると z は偶数である.

これは, 方程式 (3) を法 m ($> n \geq 2$) で考えることと, (6) から成り立つことがわかる合同式 $n^2 \equiv 1 \pmod{m}$ を用いれば示される.

4 特殊なペル方程式

条件 (6) は, 次の様に書き換えられる:

$$(7) \quad U^2 - (t^2 - 1)V^2 = 1.$$

ここで $U = m - nt$ (> 0), $V = n$. (7) は ($t > 1$ のとき) ペル方程式である. 以下, $t > 1$ とする. ペル方程式 (7) の基本解 (最小正整数解) は, $(U, V) = (t, 1)$ であるので, ペル方程式の理論から, (7) の全ての正整数解 U, V は, 次で与えられる:

$$U + V\sqrt{t^2 - 1} = (t + \sqrt{t^2 - 1})^k \quad (k = 1, 2, 3, \dots)$$

よって U, V は t の多項式である. この事実と, $(U, V) = (m - nt, n)$ を合わせて考えると, 次のことが示される.

Lemma 3. $t > 1$ ならば, 次が成り立つ.

- (i) m または n は $2t$ で割り切れる.
- (ii) $2\alpha \neq \beta + 1$.

5 役に立つ合同式

条件 (6) から, 次の合同式を得る.

$$\begin{aligned} a, c &\equiv 1 + 2mnt \pmod{n^2}, \\ a &\equiv -1 - 2mnt \pmod{m^2}, \\ c &\equiv 1 + 2mnt \pmod{m^2}. \end{aligned}$$

これから, 方程式 (3) を法 m^2, n^2 で考えることで, 次の合同式が示される.

$$\begin{cases} 2tx + 2 \equiv 2tz \pmod{mn} & y = 1 \text{ のとき,} \\ 2tx \equiv 2tz \pmod{mn} & y > 1 \text{ のとき.} \end{cases}$$

もし $y = 1$ とすると, Lemma 3 の (i) から mn が $2t$ で割り切れることから, $2 \equiv 0 \pmod{2t}$ を得るが, これは仮定 $t > 1$ に反する. 以上より, 次のことが成り立つ.

Lemma 4. $t > 1$ ならば, $y > 1$ かつ $x \equiv z \pmod{mn/2t}$.

Lemmas 1, 2 と Lemma 3 の (ii) と Lemma 4 から, 次のことが成り立つ.

Lemma 5. $t > 1$ ならば, x は偶数.

6 $t > 1$

この節では, $t > 1$ のときには, 方程式 (3) は解を持たないことを証明する. 仮に解 (x, y, z) が存在したとする. Lemma 4 から $y > 1$ であり, また Lemmas 2,

5 から, x, z は偶数なので, $x = 2X, z = 2Z$ (X, Z は自然数) と書ける. 正の偶数 D, E ($DE = (2mn)^y$) を次のように定義する.

$$D = (m^2 - n^2)^Z + (m^2 + n^2)^X, \quad E = (m^2 - n^2)^Z - (m^2 + n^2)^X.$$

D, E の最大公約数は 2 であることはすぐにわかる. D, E の形を決定するために, 法 m, n で考察をすると

$$D \equiv (-1)^Z + 1 \pmod{m}, \quad D \equiv 2 \pmod{n},$$

$$E \equiv (-1)^Z - 1 \pmod{m}, \quad E \equiv 0 \pmod{n}.$$

ここで, (6) から従う合同式 $m^2 \equiv 1 \pmod{n}$ と $n^2 \equiv 1 \pmod{m}$ を用いた. 次のことが成り立つ.

Lemma 6. 次が成り立つ.

$$\begin{cases} (D, E) = (2^{y-1}m^y, 2n^y) & m \text{ が偶数のとき,} \\ (D, E) = (2m^y, 2^{y-1}n^y) & m \text{ が奇数のとき.} \end{cases}$$

m が偶数の場合を考える (m が奇数の場合も同様). $a = m^2 - n^2 \equiv -1 \pmod{4}$, $c = m^2 + n^2 \equiv 1 \pmod{4}$ より, $D \equiv (-1)^Z + 1 \pmod{4}$ となる. いま仮に Z が偶数であると仮定する. すると

$$D/2 \equiv 1 \pmod{2}, \quad D/2 \equiv 1 \pmod{mn/2}$$

となり, $D/2$ は奇数かつ $mn/2$ と素であることがわかる. $D/2$ は $2^{2y-1}(mn/2)^y$ の約数だから, $D/2$ は 1, すなわち $D = 2$ となるが, これは明らかに矛盾である. よって Z は奇数であるので,

$$D \equiv 0 \pmod{4}, \quad E/2 \equiv -1 \pmod{m/2}, \quad D/2 \equiv 1 \pmod{n}$$

となる. これより, $E/2$ は奇数かつ $m/2$ と素であり, $D/2$ は n と素である. すると, 等式 $(D/2)(E/2) = 2^{2y-2}(m/2)^yn^y$ から, $E/2 = n^y$, すなわち $E = 2n^y$ が従う.

Lemma 7. y は偶数である.

m が偶数の場合を考える. Lemma 6 から, $(D + E)/2$ より,

$$(m^2 - n^2)^Z = 2^{y-2}m^y + n^y$$

を得る. これを法 m で考察すると, $-1 \equiv n^y \pmod{m}$ を得る. y が偶数ならば, $n^y \equiv 1 \pmod{m}$ より, $2 \equiv 0 \pmod{m}$, となり, これは矛盾. 仮に y が奇数であると仮定する. すると, $n \equiv \pm 1 \pmod{m}$ となるが, いま仮定より, $n > 1$ かつ $m > n + 1$ ($\iff t > 1$) だから, この合同式は成立しない.

次に, m が奇数の場合を考える. Lemma 6 から, $(D - E)/2$ より,

$$(m^2 + n^2)^X = m^y - 2^{y-2}n^y$$

を得る. これを法 n で考察すると, $1 \equiv m^y \pmod{n}$ を得る. 仮に y が奇数であると仮定する. すると, $m \equiv 1 \pmod{n}$ となる. よって $m = 1 + hn$ (h は自然数) と書ける. これは (6) に代入すると,

$$np = 2(t - h)$$

を得る. ここで $p = h(h - 2t) + 1$. Lemma 3 (i) から, n は $2t$ で割れるので, h が t で割れることになる. 特に, $h = t$ または $h \geq 2t$ が成り立つ. もし $h = t$ ならば, $p = 0$, すなわち, $t^2 = 1$ となるがこれは仮定 $t > 1$ に反する. また $h \geq 2t$ ならば, $p > 0$ であるので, $(-t \leq) t - h = np/2$ も正となるが, これも矛盾である.

Lemma 8. 次の不等式が成り立つ.

$$Z < \frac{\log c}{2 \log 2} \left(< \frac{\log m}{\log 2} \right).$$

これは, 一般の a, b, c に対する方程式 (1) の偶数解 x, y, z の大きさの評価式から従う ([7] 参照).

いま, Lemma 7 の証明から, m は奇数であると仮定してよい. よって Lemma 3 (i) から, n が $2t$ で割り切れる. すると, Lemma 4 から, $2X \equiv 2Z \pmod{m}$ を得る. m が奇数であることから, さらに $X \equiv Z \pmod{m}$ を得る. 方程式 (3) から, 明らかに $Z > X$ だから, $Z \geq X + m > m$. ゆえに次の不等式を得る.

$$m < Z < \frac{\log m}{\log 2}.$$

しかしこれは成り立たない. 以上より, $t > 1$ のときに方程式 (3) は解を持たないことが示された.

7 $t = 1$

この節では, Theorem の証明を完成させる. $t = 1$ を仮定する. このとき, (6) から, $m = n + 1$ となるので, 方程式 (3) は,

$$(8) \quad (2m^2 - 2m + 1)^x + (2m(m - 1))^y = (2m - 1)^z$$

となる. ここで, m は 2 以上の自然数である. (x, y, z) を方程式 (8) の解とする. Lemma 2 より, z は偶数 ($= 2Z$) である. すると, Lemma 6 の証明と同様の考察により, $y = 1$ が示される ($y > 1$ とすると, x が偶数であることが示せ, それによって, Lemma 6 と同じものが成り立ち, そこから矛盾を導く, という方法をとる).

$M = 2m(m - 1)$ と置くと, (8) は,

$$(9) \quad (M + 1)^x + M = (2M + 1)^Z$$

となる. これは Pillai 方程式と呼ばれるものである. Pillai 方程式には, Baker の理論が有効である. 実際, 方程式 (9) の両辺を左辺の第一項で割り, 変形すると

$$(0 <) \quad \Lambda := (2M + 1)^Z (M + 1)^{-x} - 1 = \frac{M}{(M + 1)^x}$$

となり, Λ は x に関して非常に小さい. Λ は, 整数 (代数的数) のべきの積から 1 を引いた形であるが, Baker の理論は, その値の絶対値 $|\Lambda|$ の下からの評価を与える. 具体的には,

$$\log |\Lambda| \gg -C(M) \log \max\{x, Z\}$$

となる ([4] 参照). ここで, $C(M)$ は, M だけに依存する正の数であり, 底 $2M+1$ と $M+1$ のそれぞれの絶対的指数的高さ (absolute logarithmic height) と呼ばれる量の積になっている. いまの場合にはそれぞれの対数がその高さに相当する. したがって,

$$-\log(M+1) \log(2M+1) \log x \ll -x \log(M+1)$$

を得る. これより, x (したがってまた Z の) 上界:

$$x \ll \log M(\log \log M)$$

を得る (Laurent, Mignotte, Nesterenko [5] による別の評価式を用いると, $x \ll \log M$ を得ることが出来る).

また, 一方で, 方程式 (9) を法 M^2 , $(M+1)^2$ の合同式を考察することで, 次のことが証明できる.

Lemma 9. $x > 1$ ならば, 次が成り立つ.

$$2Z \equiv 1 \pmod{M+1}, \quad x+1 \equiv 2Z \pmod{2M}.$$

これによって, もし架空の解, すなわち, $(x, Z) \neq (1, 1)$ が存在すれば, その下からの評価 ($\gg M$) が得られて, Baker の理論によって得られた上からの評価に矛盾する, ということを観察できる (実際には, M の, よって x, Z の有限性が出て, そのすべての可能性をチェックする必要がある). よって, 架空の解は存在せず, $x = Z = 1$ となることが示せて, 証明が終わる.

REFERENCES

- [1] V. A. Dem'janenko, 'On Jeśmanowicz' problem for Pythagorean numbers', *Izv. Vyssh. Uchebn. Zaved. Mat.* **48** (1965), 52–56 (in Russian).
- [2] L. Jeśmanowicz, 'Several remarks on Pythagorean numbers', *Wiadom. Mat.* **1** (1955/56), 196–202 (in Polish).
- [3] W. T. Lu, 'On the Pythagorean numbers $4n^2 - 1$, $4n$ and $4n^2 + 1$ ', *Acta Sci. Natur. Univ. Szechuan* **2** (1959), 39–42 (in Chinese).
- [4] E. M. Matveev, 'An explicit lower bound for a homogeneous rational linear form in logarithms of algebraic numbers. II', *Izv. Ross. Akad. Nauk Ser. Mat.* **64** (2000), 125–180; English transl. in *Izv. Math.* **64** (2000), 1217–1269.
- [5] M. Laurent, M. Mignotte and Y. Nesterenko, 'Formes linéaires en deux logarithmes et déterminants d'interpolation', *J. Number Theory* **55** (1995), 285–321.
- [6] T. Miyazaki, 'On the conjecture of Jeśmanowicz concerning Pythagorean triples', *Bull. Austral. Math. Soc.* **80** (2009), 413–422.
- [7] T. Miyazaki, 'Upper bounds for solutions of exponential Diophantine equations with applications to Fibonacci numbers', *Analytic Number Theory : related Multiple aspects of Arithmetic Functions. RIMS Kokyuroku* **1806** (2012), 134–142.
- [8] T. Miyazaki, 'Generalizations of classical results on Jeśmanowicz' conjecture concerning Pythagorean triples', *J. Number Theory* **133** (2013), 583–595.
- [9] W. Sierpiński, 'On the equation $3^x + 4^y = 5^z$ ', *Wiadom. Mat.*, **1** (1955/1956), 194–195 (in Polish).

DEPARTMENT OF MATHEMATICS AND INFORMATION SCIENCES, TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY, 1-1, MINAMI-OHSAWA, HACHIOJI, TOKYO 192-0397, JAPAN
E-mail address: miyazaki-takafumi@tmu.ac.jp